
火水風土

春奈

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

火水風土

【Nコード】

N0360L

【作者名】

春奈

【あらすじ】

「ごめんなさい、あなたを守るにはこうするしかないの」
捨てられた赤ちゃんは、拾われすくすく育ち12歳になった時、唯一の友達と拾ってくれた母の行方がわからなくなる。その時旅に出て火水風土を集める事にした。

赤ちゃん

ルーアンの真夜中に、教会がパッと一瞬だけ光った。

教会のドアが開いた、出てきたのは全身を黒で包みフードをかぶった女性で、手には毛布で包まれスヤスヤと眠っている赤ちゃんが居る。

赤ちゃんの首には、ロザリオがかけてある。

女性は、教会の前に赤ちゃんを置き言った。

「ごめんなさい、こうするしかあなたを守れないの、わかってちょうだい」

泣きながら女性は赤ちゃんのおでこにキスをし、ロザリオに

「神よ、この子をお守りください」

と祈り、何か分からない言葉をつぶやく。

そして、教会の中に入って行くときまたパッと一瞬だけ光り、それっきり中から誰も出てこなかった。

赤ちゃんはスヤスヤ眠っている。

それから30分位が経つと日が出て、隣の家から茶色の髪に真っ白いワンピースを着た女性が出てきた。

彼女の名前はトナ・ハウゼス。教会の牧師の娘だ。

きつと教会の周りを掃除しに来たのだろう。

トナは教会の前に何かがあると感じ、赤ちゃんが居るところまで走って行く。

赤ちゃんを見たトナは、驚いて周りをキョロキョロと見渡した。

それでも誰も居ないので、捨てられたんだ、と察し、赤ちゃんを抱いて家に戻って行った。

走った振動で驚いたのか、赤ちゃんは目を覚まし泣いている。

トナは、どうすればいいのか分からず困っている。

すると、泣き声で起きたのか2階から彼女のお母さんとお父さんが降りてきた。

「その子、どうしたの？」

お母さんが心配そうに聞いた。

「教会の前に居たのよ。私、可哀想だったからだって周りに誰も居ないのよ、捨てられたとしか考えられない」彼女は泣きそうな声で答える。

「ひどいことだ。こんなにかわいい子を捨てるなんて」お父さんが赤ちゃんを撫でながら呟いた。

「あなたの言うとおりだわ。この子は、私たちが育てましょう」お母さんは、愛しそうに赤ちゃんを見ながら言った。

その時、その言葉が合言葉かのように、赤ちゃんのロザリオが光った。

みんな驚いて、ロザリオを恐る恐る赤ちゃんの首から外した。

お父さんが原因を調べるためにロザリオを調べ始める。ロザリオの裏には、「ベラ」「4・16」と書いてある。お母さんが「この子の名前は、ベラっていうのね。こっちの数字は、誕生日かしら？」と呟いた。

12年と火

それから、12年が過ぎた。今じゃ、捨てられた赤ちゃん、ベラは12歳だ。

ベラはトナが、本当のお母さんじゃないことを知っている。なぜなら、顔は全然似てないし、トナを「お母さん」と呼ぶいつも「私はお母さんじゃないわ、私は代わりよ。だからお母さんなんて呼んじゃダメ」と言われたから。それに、絶対に違うとわかるのは、トナに拾われた日を覚えてるからだ。

「ベラーちよつと来て」トナに呼ばれた。

ベラは、「何？」

と返事をする时下に行った。

「また火がつかないの、つけて」

「またなの！ 今週で五回目だよ。早く新しいマッチ買ってよ」

ベラは、文句を言いながら火をつけた。普通は、マッチでつけるのだけれどベラは、人差し指を立ててると、着火マンのように指先に火がつく。

そう、彼女は火を操れる。でも、その事は家族以外、誰も知らない。家族とベラがその事に気付いたきっかけは、ベラが3歳の時だった。

トナと2人で散歩してる時、近くで火事があった。ベラは好奇心で近づいた、そのとたんベラを飲み込むように火が襲った。

みんなが、助けようとしたが、キャツキャツと笑ってベラがすぐに出てきた、体には火傷の痕も火無く、みんな火がどこかに行っただけだ。

「きせきだ！」

と声を上げ喜んだが、ただ1人トナのお父さんは違った。

お父さんにはベラが火を吸収したと思い、

「悪魔だ！」

と呟いた。

お父さんが思った通り、ベラは知らぬ間に火を吸収していた。

異変

あの事件から一週間後、トナのお母さんが未知の病気で倒れた。すぐに病院に連れて行き、検査を何度も何度もしたが、何も分からなかった。そして、2日後、お母さんは苦しみながら息を引き取った。皆、悲しんでいたが、ベラは違った。お母さんが死んだという事は理解しているはずだが、普通に笑って死んだ人の周りを歩いてた。その時、お父さんは本当に悪魔なのだと思った。

それからトナのお父さんは、ベラに冷たくなった。

悪魔と一緒に暮らせるか、と言い放ち、家の隣にある教会で暮らす事にした。

あの事件からベラは、火を操れる事を知った。トナも気付いた。幸い、お父さんには、気付かれてなかった。

トナはみんなにこの事を隠し続けた、お父さんにも。

「ベラー居るー？ 海行こうって約束したでしょ！！」

外から聞こえる。女の子の声だ。

「朝からうるさいよ。憶えてるし、そんなに大きな声出さなくても聞こえるよ。サニーニャ」ベラは、起きたばかりで、髪がクシャクシャだ。2階の自分の部屋の窓からそんな髪をもっとクシャクシャにしながら答えた。

「だってー。早く行こうよー海だよ」

「海なんて5分もありゃ行けんでしょ」騒ぐサニーニャに冷静に2階の窓から言う。

「そうだけど、ベラと早く行きたいの」駄々っ子のように足を踏む。「分かったから。ちょっと待ってて」寝巻きを脱ぎながら言った。

トナが作ってくれたゴスロリのようなワンピースに着替える。トナは小さい頃服を作る仕事に就きたかったらしい。今ではベラのために作っている。しかもその服は他の人とは違って変わっているの、人ごみで迷子になっても見つけられる。ベラが一番気に入って

るが今着ている服だ。

髪をとかして用意が整った。ご飯を食べずに外へ出る。
「ほら行くよ」

友達

サニーニャとはベラの唯一の友達だ。

みんなあの事件で奇跡だ、と騒いでいたが内心怖がっていた。

本当は奇跡なんて信じて居なかった。

だから、サニーニャしか友達はいない、サニーニャは奇跡を信じてるらしい、それに引越してきた時、ベラが最初に声をかけてくれたからベラが怖いとは思わなかったのだ。

海につくとサニーニャは早速靴を脱ぎ海に駆けていくと、いつも以上に騒ぎ、はしゃいでいる。ベラはあまり濡れたくないので、浜辺で立っている。

「ねえベラ、私が死んだら悲しい？」

突然の問いに困惑するベラ。サニーニャには

「なっ、急に何言ってるのサニーニャ」

「いいから！ 悲しい？」

「そりゃ悲しいよ。会えなくなるんだから。なんで急にそんなこと言ってるの？」

「実はね。私、ベラに隠してる事があったの。ここに来たのは理由があるの、ここの病院すごいでしょ、だから来たの。私、小さい時から体が弱くて風ばっかひいててね、8歳の時とうとう心臓の病気になっちゃったの」空を見ながら話している。

「でも、いまピンピンしてるじゃない」

「まあね、ここに来てから調子がよかったの。でも、昨日病院に行ったのそしたらお母さんに彼女もう長くないですよ、後2〜3ヶ月でしょうね。って言ってるの聞いちゃたの。私も気付いてた、そろそろだって」サニーニャは、泣いていた。でもベラは、泣いていなかった。

「ベラ、私が死んだら泣いてね。いーっぱい。だっていつも泣かないんだもん、死んだ時くらいベラの泣き顔、見たいわ」サニーニャ

は泣きながら悲しく微笑んでいた。
「うん、わかったよ」

涙

「じゃあね。ベラ」

「バイバイ、サニーニヤ」2人ずっと手を降りつづけた。

ベラが家帰るとすぐに二階の自分の部屋にこもった。

一時間近くたってから、トナが部屋に入ってきた。

「どうしたのベラ、具合でも悪いの？」心配そうにトナが言った。

「そうじゃない。大丈夫だよ」

「なんかあったんでしょ。話て！」

「わかったよ」

ベラは、サニーニヤに言われた事を全部言った。

全部話すと結構スッキリした。

「そっか、サニーニヤの事ね。思い詰めても意味ないのよ。今出来る事をやってあげなさい」

「私が気にしてるのは、サニーニヤの事じゃないの」

「えっ！じゃあ何？」

「もちろん、サニーニヤの事もだけど、私の事なの。今思えばおばあちゃんが死んだ時も涙がひとつもでなかった。サニーニヤに言われた時だって。私は、涙が枯れたのかもね」

「しょうがないわよ。涙は出たくて出るもんじゃないの、勝手に出てくる物なの。わかった？それにね、あんたはの涙は枯れてないよ。あんたは、強いだけよ」

「そうかな？まあ、わかったよ」

「さっごはんにするよ」

本

「ベラ起きて！」

ベラを揺らしながら言った。

「何？ トナ」ベラは、眠たそうに言った。

「今日は掃除の日なんだからね。早く起きて着替えて」そう言いながらトナは自分の古着を渡した。それをベラは取り、パジャマを脱ぎながら、ご飯は？ とぼそつと呟いた。それを聞き逃さなかったトナは、

「ああ、用意するの忘れた。いっか掃除終わったらで」と陽気に答える。

「用意出来たよ。で、どこ掃除すんの？」

自分のベッドに座り、言う。

「あんたは、自分の部屋と書斎。私は庭と自分の部屋と一階やるから早く終わらせて来て、手伝ってね」雑巾をベラに投げながら言う。ベラが取ったのをチラッと見ると、部屋を出ていった。だが一言、言うのを忘れてすぐに戻って来た。顔をひよいと少しドアから出して、

「サボるんじゃないよ」と釘を刺した。

「はいはい」めんどくさそうに答えると自分の部屋を掃除し始めた。と、いってもベラの部屋は元々綺麗なので、掃除する所なんて無かった。

「次は、書斎か」ベラは、はあとため息を吐く。

でも、少しわくわくしていた。書斎は階段をベラの部屋で挟んだ所にある。書斎なんてまだ数えるほどしか入ってない。

一回目はトナと、二回目は最悪だった。サニーニヤと家で鬼ごっこしていて、ベラが書斎に入ったら本棚に当たって、本が全部落ちてしまった、その音を聞いたのかトナが駆けつけて来て怒られた時から、トナが居ない時だけ書斎に入るようにしてる。

でも、この頃はあまり入ってない。

「あっ本が増えた」

トナの本棚には太くて字が小さい本ばかり、その中で一番太くて古い本は、隣の大きな教会を建てた人から代々守ってきた物らしい。設計図やなんかを書いてあると噂だが、誰も開けた人はいない、いや、開けられた人がいない不思議な本なのだ。

ベラは好奇心でその本をとった、自分なら開けられるんじゃないかと思ったからだ。

本はベラが思った通り普通に開けられた。本の中は噂どおり、教会の設計図だ。

「何だ普通に開けられるじゃない」少し拍子ぬけしたような声で言った。自分なら開けられるとは思っていたものの、開けられなかったら無理矢理でも、と少し開けられない方に期待をしていた。

「そうかな？」知らない声が聞こえた。

「誰！」驚いて後ろのドアを見た。だが誰もいない。居てもここには住んでいない人だ、この声は聞いたことがない、きっとこういう声はハスキーボイスと言うのだろう。

その声がまた喋った。

「私はこの部屋に居るけど、体はないよ」ふははははと笑った。ベラは透明人間？　と思ってみたが馬鹿らしくて口に出すのは止めた。

「いいから誰なの？」

馬鹿にされてるみたいで嫌な気分になった。

「もう降参かい？　声の聞こえる所を見てるっていうのに。ふはっ、まあいいや。私はお前が持つてる本だよ、ベラ」それを言われてみれば、声がするのはこの本だというのに気がついた。

「なんで私の名前を知ってるの？　あなたの名前は？」

これは一番知りたいことだった。

「私はマーヴェラよ。まあ、お前の名前を知ってたのは友達に教えてもらったからよ。嘘だけど」また、ふははははと笑うとすぐに、

「予言者だからよ」と本当のことを言った。ベラは少ししか話してないのに、マーヴェラの嘘だけが口癖のようだ、と思った。

「それじゃあ、マーヴェラ。なんで喋ったの？ 他の人には喋りかけなかったのに」

「いきなり呼び捨てかい？」

それを言った割にはきつい言い方じゃなく、別にどっちでもいいけど、というような声だ。それに気付いたベラはわざとらしく言う。

「じゃあ、マーヴェラさん？」

「いや、マーヴェラのほうがいいね、ふはっ」面白そうに言う。気付いてはいたけどその口ぶりに言わなきゃいいのに、と思った。本を机の上にそのまま置き、ほうきで床を掃く。

「ねえ、さっきに質問の答えは？」

床を掃きながら聞いてみた、少し話をはぐらかされてるような気がしたからだ。

「最初は喋らないつもりだったよ」

声が変わった。真剣で、少し冷たい、さっきまでとは違う声だ。空気も違う、緊迫した空気になった。

「たまにね。この本を開けられる人がいるのよ、多分その人だと思ったから設計図になった。」

でもね違った……お前はこの本の持ち主だ。何年も待ったかいがあったよ」最後は優しくかった。空気がもとの空気に戻り、声もさっきの声に戻った。

その時、タイミングよくトナが階段の下から話しかけてくる。

「ベラー、まだなの？」

少し怒っているようだ。時計を見てみると掃除を始めてから1時間経っている。普通は元々綺麗なベラの部屋に、少し埃が目立つくらい。の書斎を掃除するには30分あれば終わる、なのにそれを30分も過ぎてもまだ床を掃いただけだ。

「もう少しだよ。トナが思ってるより汚いんだよ!」

「どうせ、本でも読んでるんでしょ」さっきのベラの返事は軽く無視され、自分の意見を勝手に言う。それにイラッときて強く、読んでない! と言いつ返す。

「別にどっちでもいいけど、早く終わらせてきて」

「はいはい」と返事をするトナはどこかへ行った様だ。

「うそつきだねえ、ふふ」ベラは今顔が見えたらニタニタしてるな、と思った。

「嘘なんてついてないよ。私はマーヴェラと喋ってるんだ」勝ち誇ったような顔をして言う。

「まあ、考えてみるとそうだね。ふはっ、でもそれは屁理屈っていうんだよ」こちらに対抗してなのか勝ち誇ったような声で言っている。あははっとなら笑い、言う。

「もう掃除するからさよならね」勝手に本を閉じようとする。すると、マーヴェラがそれを止めた。

「ちょっと、私はここにいていいけど意思がある、普通の本じゃないのよ。それにこれはお前のじゃないんだから勝手に自分の物のように扱わないでよ」

さっき言ったことと矛盾してることにベラは気が付かず、彼女は謝った。

「ごめんね。でも、もう終わりだから」

「それじゃあ、これだけは約束よ。毎日ここに来て」その声はとても真剣な声だが、さっきとは違う、冷たくなく逆に暖かい。

何故かベラは喋り方が覚えてもない母親のような感じだと思った。

「わかった。じゃあね」

そのあと、マーヴェラの声が聞こえなくなったので本をそっと閉じ、もとの場所に戻すと走ってお風呂場に行き、バケツに水をため書斎に戻ると雑巾で床と小さい窓を拭く。ここは本棚のおかげで小さいので早く終わり、雑巾を洗ってからバケツを風呂場に置いて、

すぐにトナのいる庭に向かった。

「今頃来ても遅いわよ。もう下の階しかないよ」声が疲れきっている。

「じゃあ、トナより少し多くやるよ」

「よし、だったら私は台所をやるから、それ以外は全部お願いね」ニコツと笑い言う。

「えっ、ああもういいや。わかったよ、やるよ」しょうがないと心の中で呟き家に入った。

最初は風呂場に行く。浴槽は綺麗なのだが周りが石鹸などで散らかってる。置き物くらい買ってくれ、とベラは思う。全部綺麗に端へ寄せる。

そんな感じで全ての掃除をする。居間なんかは、毎日掃除してるので意味がなかった。

掃除が終わったのは5時だった。それからご飯を食べたのは2時間後だ。お腹が空きすぎてあまり入らなかつた。そのあとは風呂の中で寝てしまったので、すぐにでて寝ることにした。

ケンカ

次の朝

ドアをノックする音が聞こえる。まだ七時頃なのにサニーニヤが遊びに来たらしい。トナが起きたばかりなので、寝巻きにボサボサの髪でドアを開ける。

「ベラいる？」

普通に家に入ると聞いた。

「いるわよ、でもまだ寝てるね」トナがあくびをする。

「じゃあ起こして来まーす」サニーニヤは階段をうるさく上がった。すぐ隣のベラの部屋に入ると耳元で、

「ベラ起きて」と大声で言った。そうしないと起きないことが分かっているからだ。それでベラは起きる。

「うるっさい、私は寝てる！」

鬱陶しそうに手を振る。

「うるさいじゃない、起きろ！」サニーニヤはまた大声で言うとう布団を取った。

「うるさいうるさいうるさい、疲れてんのわかんないの？」

布団を奪い返すと、またベッドへ戻る。

「わかるわけないでしょ、それにね、疲れてもんは寝れば治るの！」

そこから無視し続けるが、ひとりで勝手に喚いていてうるさいので眠れない。

「わかったから。降参だよ、すぐ行く」さあ出てけと言うように手を振る。

「本当だね、ちゃんと来るんだよ。来なきゃまた来て喚くよ」

「はいはい」

それから10分たった。

「来ない！」

またサニーニャは、階段をうるさく上がった。

ベラの部屋に入るとベラは仰向けで寝ている。予想はしてたが、本当にするとは思ってなかった。ベラはあれからすぐに寝ていた。

「ベラおきて」いい加減にしてよ、とでも言うような声だ。

「はいはい、起きてるよーこの通り」ベラは寝ながら右手を上げど
うだ、というように言った。

「もういい、帰る！　じゃあね」

「はいはい、うるさいのが居なくて一日ずっと眠れるよ！　バイバイ！」

その日は言ったように、一日中寝てる予定だった。だが、思うようにはいかずサニーニャが帰った後、すぐにトナが来て起こされた。遊んできなさい、と言われたがああ後に行くのは恥ずかしいし、意地ってものがあつたので行けない。ベラは、朝の七時何かに来て、疲れてる友達を無理矢理起こそうとして、ちよつと寝てただけで怒って帰るんだからあっちが悪い、と考えていた。それにサニーニャは怒ると根に持つので、会ったら嫌みを言うだろう、当分はこんな些細なことでも遊んでくれない。だけど、目も覚めてしまったのに外に出れなくて気分が悪いうえに暇なので、マーヴェラのところへ行くことにした。

「ああ、来てくれたんだね」本気で喜んでる感じではない。

「まあ、うん。暇だったから」頭を撫でながら言う。

「さつき、サニーニャって子と喧嘩したろ」面白そうに言うベラが驚きの顔を見せた。そしてああ、わかったと頷き、こう言った。

「そういや、予言者って言ってたものね。知ってたのに言わなかったんだ。おかげで当分遊べないわ、時間がないのに……」寂しげに下を向く。

「関係ないね。私は聞かれたことしか話さない主義なの、嘘だけど」ベラとは裏腹に気楽に言う。

「ふざけんじゃないわよ……。でもしょうがないわ、起きちゃったんだから。そういえば、この本の持ち主だったって言ったね、あんた

予言者でしょ、なんで、だった、なのよ。わかるはずでしょ」手を広げて分からないときよくやるポーズをやらながら言う。

「ああ、あれはわからなかったからね。予言はすきなときにできるんだよ、長い間あそこにいたから期待する気もなくなってるね、それに毎日予言するわけにはいかないしね。占いみたいなものよ」

「じゃあ、私を占って」命令してるような表情で言う。

「その顔じゃ、嫌だって言っても聞かないでしょうね」ため息をついて、これ疲れるのよ、と呟くと「今からやるから静かにしてて」そこから沈黙が始まった。何分か経つと手をたたくような音で沈黙が破られる。そして忠告するような声で、

「明日、お前悪魔に襲われる」と言った。

「はあ？ 悪魔？ 分かてると思うけどそれは子供を怖がらせるためと、悪い行いを押し付けるためにあるものよ。いわば、サンタクロースのようなものなの」真剣に待ってって損をしたとでも言うように食いかかる。

「よく知ってるわね、もうサンタクロースは信じてないのかい。まあその悪魔と格好は似てるね、角が生えてて尻尾がついてる黒い奴よ。でも、私が言ったのはお前が言った理由のなまっちよろいもんじゃない、現実にいるしそれより強い」脅すように話す。

「だから？ 十字架持って教会にでもこもって神に祈る？」

ベラは冗談じゃないとはなを鳴らし言う。

「駄目だよ！ そんな事しちゃあ、今の時代では教会は祈ることだろうけど昔は違ったんだから、この世界と異界を結ぶ扉パスノア・リスリーチモなのよ」真剣に説明をする。話の内容はおかしいが説得力がある。だが、話の内容がおかしいには変わりない。もう付き合ってられないと、とうとうベラの我慢が切れた。

「ちよっと待て、《パスノア・リス》？ 《プリーヂモ》？ 教会は扉？ なんだそれ？ からかうのもいい加減になっ、私はそんなこと信じるような馬鹿じゃない。第一、悪魔がいたとしても私には関係ない！ 何故か？ 私は襲われるようなことした覚えがない

！」

ベラは怒鳴りつけた。

「ふははははっ、そうかい、信じないんだね。でも当然のことか。まあいいさ、別に明日死ぬわけでもないんだし、ただ痛い目を見るかもね。ああ、そういえば……明日誕生日だねえ、4月16日」

「えっ」ベラは丸つきり忘れていた。首にかけてあるロザリオ、いつも見るのに忘れていたのだ。

「忘れてたね？ 明日の誕生日は最悪だね、ふははははっ」それからマーヴェラは何も言わなくなった。

「勝手な奴！」

力を込めて本を閉じると、雑に本棚へ戻した。

最悪の誕生日（前書き）

最悪の誕生日

ベラの誕生日。

彼女は朝早くに家をでて教会に遠い海に来た。

マーヴェラが言ったことはあまり信じてないが、説得力のあるあの声に動かされていた。

何時間も一人で遊んだ。それに飽きたところで白い砂浜に座り、「はっ！ 悪魔も人一人もこないじゃない」と、悪態をつきながら、帰ってマーヴェラに文句を言おうと思う。それでも、少し不安で今来るんじゃないかと思はらく座ったままだった。そして、吹っ切れて本当に帰ろうと思ったとき、

「キキキキッ」

「クククククッ」

「きゃきゃきゃきゃ」

どこからか不気味な笑い声がした。

ベラは辺りを見合わせた、笑い声をするのはベラが来た道からだ。それは、悪魔としか言いようがない。顔は眼がない奴や口が無い奴ばかりで、色は真っ黒でしっぽも角もあるし槍もある、槍の先は3つに尖っていて何でも串刺しに出来そうだ。空にもいる。その悪魔は真っ白で鳥の翼を持ち、顔は下にいる悪魔と違って眼や口もある、でもしっぽや角は無い、けれど、手には丸い何かを持っている、その何かは黒くて爆弾のようだ。

それをベラに向かって投げた。ドスッと鈍い音が聞こえた。

「うわっ！ 何これ？」

その丸い何かに触ろうと手を伸ばすと、

（近づくにつ）どこからか低い男の声が響き、手を引っ込める。

「へっ、誰？」 阿保みたいな声をだし、またベラは周りをみる。だが人は誰もいない。

悪魔はだんだんと近づいてくる。何も戦う方法がないので、走っ

て逃げる。

「こんな時に空耳？ いやこんな時だからなのか？」

と、自問自答する。すると、また丸いものを投げてくる。

（馬鹿め、こんな時に空耳なんて聞こえるわけだろ）一人ごとのように話しかける。その声は頭に響いている。それに気づき始めているが、こんな質問をする。

「あんた誰？ どこにいるの？ 見てるなら助けてよ」

（俺はお前の中にいるんだ。お前は火が使えるだろう、それだよ俺は）

「あんたは私のなかにいる……？ まあ信じよう。居ないと思ってた悪魔が私を今、追いかけてるんだから」自分を納得させるように話す。そして、後ろを見る。黒い悪魔は足が遅いのか遠い、上の白い悪魔は今にも襲ってきそうだ。なのに襲ってこない。

（そりゃ良かったぜ、信じてくれなきゃ助けられないしな）

助けると聞いて飛び上がった、期待が体中に広がる。

「あんた私を助けてくれるの！ 早く助けて！ 逃げる方法でもいいから！」

（まあ落ち着け、あいつらから逃げる方法はない！ これは断言できる。あいつらはお前がこの世界の裏側に逃げても、追いかけてくる。そういう命令を多分されてるからな）

「なんで？ 私、襲われるようなことしてない」昨日、マーヴェラに言ったことをそのまま言った。

（そんなこと関係ないんだよ、あいつらには。関係あるのは命令遂行とお前の血肉を食れるかどうかだけだ）

ベラは背筋が凍った。自分の死を想像したのだ。

「で、でも命令する人はなんで私を殺したいのよ。絶対にこの人じゃないわ、命令したのは。そうだったらもっと前から襲えるもの」（ああ正解だ。それにあいつらはこの世界の奴らじゃないしな。）

それに悪いのはお前の行動とかじゃなくて存在だ。お前は俺を、火を操れるだろう）

「あんた、私に死ねって言ってるの？」

声が陰しくなる。火はそれに焦り、すぐに弁解する。

（いやいや、違う。あっちにはそれが好都合だがこっちとしてはとても不都合だ）

「そう、じゃあ助けて！　じゃないと殺されるわ」脅しがかった声でいう。

さっきまで遠くにいた黒い悪魔が近づいて来てる。ベラが疲れて走る速度が遅くなっているのだ。それに、もうすぐで砂浜が終わり海に入らなくていけない、ベラは泳げるがそんなに早くない、入ったら白い悪魔の爆弾のようなものを投げられ、終わりだ。

（分かった。でも体貸してもらおうぞ）

「いいわよ。死ななければ……」

（そうか、傷は負うかもしれないからな）

その忠告に、えっ、と反応したが口から声として出なかった。火にもう体は支配されていたからだ。

ベラの体は熱くなり、茶色の髪と目は真っ赤に変わった。

死ぬまでにやりたい事（前書き）

これはサニーニャ視点で書いたものです。

死ぬまでにやりたい事

私は、診察室の扉に寄りかかり、お母さんと先生の話してる事を聞いていた。

最初は、何か異変は無いか、とか私の体調など周りの人の事を話していた。だが、話が終わり、しばらく沈黙が続いている。

「彼女もうかなり病気が悪化してますよ」先生が突然言った。それは衝撃的で、信じられるような事では無かった。でも、うすうす気付いてはいた、確かに悪化している。少し走るだけで息切れをするようになった。お母さんは、気付いていないようでよかった。

「えっ！ でもかなり元気ですよ、ここに来る前とは大違いです」必死に訴えているその声は泣きそうだ。

「私もびっくりです。あんなに元気なのに、病気は悪化してる。本当はもう前にお亡くなりになってもおかしくない状態なのに、本当にここまで生きれたのは奇跡ですよ」ここまで生きてこれたのが奇跡か、こんなに生きれて良かったよ、じゃあ。こんなに生きれたんだから今、死んでも後悔しないな。

「で、先生治るんでしょうか。先生はあの子のこと、治せるんでしょう」

「残念ながらあの子は、私にもほかの先生方にも治せないでしょう」とても沈んだ声で言っている。多分、先生は下を向きながら言っている。悲しいときはいつもそうしている先生だったから。すすり泣く声が聞こえる。

「嘘でしょう、あの子はただ死を待つしかないのですか」お母さんの初めて泣き声を聞いた。これまで、私の病気を聞いても泣かなかったのに。

「はい。そういうことになります」とても悔しそうな声だ。本当に私のこと考えてくれてたのか。

「本当に治せないんですか？ どこに行っても？」

お母さんは食い下がった。

「ええ、でも私だって一流の医者として通っています。出来ることをして限界まで尽くします」さっきとは違って声が明るい。希望に満ちていると言うのかな？

「ありがとうございます。あの子は、いつ逝ってしまうかもしれないのですか？」

「私の予想なのでわかりませんが、長くて2、3ヶ月でしょう。でも、もっと生きれるかもしれません」明るかった声が急に沈んだ。

「そんなに短いんですか！」

取り乱して声が裏返った。

「あくまで予想ですから、落ち着いて聞こえてしまいますよ」穏やかな声でお母さんをなだめる。

「そうですね、たかが予想ですよ。大丈夫です、もう落ち着きましたから。それじゃあ、これからはやりたいことをやらせてあげます。それでは……ありがとうございます」鼻をすすると、扉を開けた。すぐに私は座っていた椅子に座った。

「ねえ、先生なんて言ってた？ 嬉しい知らせ？ 悪い知らせ？」

お母さんは今にも泣きそうな顔で固まっている。

「お母さん！」

お母さんの腕を揺らしながら叫んだ。我にかえったようで、

「えっ、何？」

とおかしな顔で聞いてくる。

「だから、先生なんて言ってた？」

「あっ、うん。もうすぐで治るって。頑張らましょね」笑顔で答えてくれた。でもその笑顔は引きつっている。固まってる時の顔は自分でわからなかったのかな？ 泣きそうだったのに、それを見てから言われても全然説得力がない。だけど私を傷つけないための嘘だとわかってるから、私は知ってるなんて口が裂けても言えない。「そっか、良かった。じゃあ行こうか」お母さんの手を取り、握りしめる。

「ねえ、今日、何食べたい？ なんでもいいわよ」前を見たまま言う。こんなこと言われたの初めてだ。

「いつもどうりでいいよ。でも、久々に焼き魚とか食べたいな」お母さんのほうを見るが、こっちを見ない。悲しくなってきた。

「そう、今から買いに行きましようか。サニーニャ」

「うん」

歩いている間に考える。お母さんは私を一人で育てた。お父さんは私と同じ病気で私が生まれる前に死んでしまったらしい。私が死んだら一人ぼっちだ。そしたらどうなるのかな？ お母さんは私が病気と聞いたとき、ひどく落ち込んでいた。私も聞いたとき、どうせ死ぬと思って部屋にこもりきりで、迷惑を掛け続けた。でも、ベラに会って不思議と死にたくない気持ちになった。不安だ。私が居なくなったら自殺とかしちゃうんじゃないかって。

そうか、死ぬまでの間にお母さんとの思い出をいっぱい作ろう。

私も悔いの内容に生きよう。

能力

火はベラの体を操り、悪魔の方に向きをかえ、久しぶりに自由になったかのように伸びをすると嬉しそうにニツと笑い、周りを火の海に変えた。木は勢いに負けて倒れた。一番近くにいた悪魔は全て塵になり、綺麗な砂浜を汚くしていった。上の悪魔は火を蛇のようにくねくねと上に登らせて焼き払っていく。火を怖がり町へ逃げ出す悪魔も居たが容赦無く、手で火の丸い玉を作りそれを投げて倒していく。でも2、3匹悪魔が町へ逃げだした。

それをベラは気がついたが、火は気づいていないようだ、ベラは声が出ないので火に言う事が出来ない。

ベラは気づいた。

（火は興奮してる、分かりやすい事も見逃してる）と。

（どうしよう！ 火は私の声が聞こえない。だから止められない、これじゃ町の人が危ない）

ベラが考えてる間、火は近くに居るすべての悪魔を殺し終えていた。

「おい、ベラ終わったぞ」満足気に言う。

（あんた、興奮してたから分からなかったでしょ！ 町に悪魔が逃げた）

「うそだろ、なんで言わない」

（言えなかったから！ 話してないで町に行くよ。走って！）

町に着くとベラは息をのんだ。町の人は普通にいつも通りに笑い、喋り、買い物をしている。近くに悪魔がいても反応しない。無視しているようには見えない、それにこの人だったら悲鳴を上げて逃げ回っている。

（うそっ！ みんな見えて……ないの）ゴクリとつばを飲む。

「そうみたいだな。でも、見えようが見えまいが殺す事には変わりはない！」

また嬉しそうにニツと笑う。

火を出すと、周りの人が悲鳴を上げた。近くに化け物がいるのに気がつかなくせに、とベラと火は思った。ベラ達には今にも襲おうとしている悪魔達から人々を救っているのだが、人々からはベラがおかしくなった、としか目に映らない。ベラにも感謝されたい気持ちはあるのだが、この町でベラは悪魔として通っている、それを考えると無理だ。思うだけ無駄で価値がない。

火の方はそんなことを無視して上にいた悪魔と同じ手で殺していく。すると、悪魔の後ろにある家に火が移ってしまった。やっぱり、これは人がうじゃうじゃいると使い勝手が悪いな、と思いながらも、気にせずにどんどん悪魔を殺して、どんどん火事にしていく。殺すにつれ、ベラがある事に気がついた。

（数が増えてる。私が見た限りで逃げた悪魔は2、3匹くらい。まだ見れてない悪魔がいるかもしれないけど、火が殺し終わったのが何分もしないうち、もしかしたらどこからか増えてる？　そういえばマーヴェラが言ってたな。教会はこの世界と異界を結ぶ扉って、じゃあ悪魔はそこから増えてるのかも）

考えている間に火は一番遠いところに最後の一匹が残っている。だが、その近くにはサニーニヤがいる。普通なら火事だから逃げるのだが、気づいてないのか鼻歌を歌いながら前へ進む。火はサニーニヤを知らない。気にせず走って悪魔のもとへ行く、サニーニヤがベラに気付く。笑顔で手を振っているが、ベラが近づくとつれてサニーニヤの目が丸くなっていく。でも、怖がりもせず、手を打つと、

「それマジックでしょ」と能天気笑い。感心していた。

それを見計らい悪魔がサニーニヤの胸を前から槍で刺した、ちょうど心臓のところだ。

ベラは絶叫した。でも、声は相変わらずでない。

サニーニヤは痛っ、と軽い反応で、絶叫したのが恥ずかしい。それを見て火は安心してサニーニヤを傷つけないように一瞬で悪魔に

火をつける、悪魔が苦しそうに悶えている、それに火力が強すぎたかサニーニヤが見えなくなった。悪魔が死ぬとサニーニヤがいない。見えないうちに逃げたかと思った。

（心臓貫いたのになんでまだ生きてるの？ 死んで欲しいというわけじゃないけど、気になるなあ。まあ逃げてくれたからいいか）

「まだ、居た」舌打ちをすると一番手っ取り早い火の玉で倒す。その悪魔がいたのはここから然程遠くない、目でも見えるくらいで何故見逃したかわからないほどだ。

謎が増えるばかりだとベラは思う。

（いくらなんでも不自然すぎるでしょ。どこかへ逃げたとかで人が減ってるのは納得がいく、でもあんなに増えるのか？）

それを遮り火が、

「体、返すぜ」と言ってきた。

ベラはホッとした。あんなに楽しそうに戦っていたから返してもられないかもしれない、と密かに思っていたからだ。ただ服は綺麗ではない。どこで切ったのか切り傷もあり、体中が痛い。少し疲れを取るために座り、休むと、すぐに火事の後始末にまわった。

やはりこの人が嫌いでも罪の意識からは逃れられない。人一倍は頑張った。人はベラを恐れて近寄らないので、ベラはそこらじゅうを走り回り、水をまき、燃え移らないように隣の家を壊したり、人が協力してる中全て一人でやった。

家を壊してる時は酷かった、最終手段だったので、宣言しないで壊したときは罵声を浴びせられ酷い人は石を投げてきた。でも詳しく遠くから説明するとみんな納得してくれたようで、自分からやるようになった。そのおかげで教会や自分の家にいかなかった。全て終わると静かに家へ帰っていった。

悪魔

家に入ると思ったとおりにトナはカンカンだ。綺麗な顔が鬼のようになっている。

「何をしたの!」

と、トナ。その声を聞いてイライラしてきた。何が! と怒鳴る。

「何がじゃないでしょ! 起きるとあんたは居なくて、帰ってくる
とあんたはボロボロ、町は火事! あの火事はあんたが起こしたんでしょ! どうして使ったの?」

「どうしてか? 話すよ! でもトナは信じない! 絶対に」怒鳴り過ぎて頭が痛くなる。

「信じるから、話して」いつも優しい顔で言う。信じないと言う言葉に反応したのだ。

それじゃあ、と決心して話し始める。

「事の始まりは、掃除の日。トナが何話してるのって聞いた時、私は本と話してた」トナの顔を見ると元の鬼の顔に戻っていた。

「ええ、信じてない。もっと現実味のあるいいわけをしなさい」

いいわけじゃない! 怒鳴ると間をおき言う。

「これが現実なの。証拠ならあるよ、2階のトナの書斎。信じないなら行くよ!」

「わかったわ、行きましようか」

2階に行つてベラは、マーヴェラの居る本を取る。

「ベラ、それ、開けたの?」

トナは恐る恐る聞いた。

「そうだけど?」何か問題とキョトンとして言う。

「どうやって……」

「それは後だよ。マーヴェラ起きて」

本を床におき、自分たちも座る。

「あら、今日はお客さんもいるのねえ?」

すぐにハスキーボイスが聞こえた。

「うん、トナだよ」少し不機嫌な声で答える。

「ああお前の育て親。こんばんわ、トナ」

トナは固まっていた。本が喋ってるということが信じられない、現状が全然わからない。だから裏返った声でやつと口を聞いた。

「なんで、本が……喋ってる」

「私にも分からないわ。でも、喋ってる。分かった？ 私は嘘なんてついてない」

「ごめんなさい」抱きつくとき「私しか信じてあげられないのに」と今にも泣きそうな声で言う。彼女にとってベラを信じられなかったのはショックなことだ。怒りに任せてベラを信じることを止めた、とても自分を恥じた。

「大丈夫だよ、別に気にしてないから」優しくなだめる。すると、わざとらしく咳きをするとき、

「いいところ悪いんだけどね。私もいるのよ」マーヴェラが言う。その声は嫉妬も入ってるようでとても複雑だ。

「ああ、うん。ごめん」ばつが悪そうに二人は離れた。

「それでいい。それで、当たった？」

いつも通りの何も気にしない声に戻った。

「当たった」下を向いて、素っ気なく答える。

「ヤツタね」

「なんで喜べるの！ だいたい聞かなくてもわかるでしょ」ベラには驚きしか出てこない。

「当たったから喜ぶのよ。それに運命は変えられちゃうのよ」陽気に話すマーヴェラ。体があつたら踊ってるんじゃないかと思うほどだ。ベラはふんっ、鼻を鳴らす。

「ねえ、なんの話してるの？」トナが首をかしげ聞く。

「マーヴェラは予言者なの。今、当たった？ って聞いたのは今日のこと。私がこうなるの知ってたのよ」疲れたような声で言う。

「そう、私は予言者よ」どうでも良さそうに言うとき「ねえ、今日の

話してよ」と話を変える。

眠そうにあくびをしながら頷くと話し始める。

「海へ朝早く行ったの」

「へえ、お前私のこと結局信じたの」意地悪く聞いてくる。

「信じてなかったわよ、まったくね。でも一応行くことにしたのよ」

「どうして、海に行ったのよ！」大声で聞いた。

「マーヴェラが教会に行くな！　って言ったからよ。ここは隣だから、一番遠い海に行ったのよ」ベラは眠たくて頭が重いのに、これからいちいち説明しなくてはいけないのか、と思うと気が重くなってきた。

「話を戻すけど、悪魔が」トナの大きなえっ、と言う声に邪魔された。

「悪魔!？」

「そう、悪魔だよトナ。多分、今トナが想像したので大体合ってるよ」呆れて穏やかに言う。

「で、でも、悪魔よ？　そんなのいるわけじゃないでしょ！」

トナは取り乱した。

「ふははははっ、お前も同じだねえ、ベラも同じこと行ったのよお。まったく、すぐに受け入れてくれない、頭が硬すぎるのよね」最後の方から独り言の悪態になった。

「私も同じこと言ったのよ、全然信じなかった。でも考えてみてよ、私の服はボロボロでしょ、それに火事よ？　私がわざとやると思う？　そりゃみんなのこと嫌いよ、大っ嫌い。でも皆を殺そうとか、傷つけようとか考えた事ないわ」トナの目を見て説得する。しばらくの静寂。そして、

「ええ、そうね。現に本も話してるしね、ごめんなさい。続きを話して」トナはやっと冷静になり、言った。

「うん。しばらく悪魔なんて来なかった。だからあんたに文句を言おうと思ったの」そう言って本を指す。

「でも、しばらくは行かなかった。で、立ち上がったら来たわ。黒

いのと白いの。白いのは天使に似てた、黒いのは丸つきり悪魔だね」
「そいつらには一応名前があるのよ。黒いのがデビル・ビルクリル。白いのはエンジェル・ルリクルビ。エンジェルの方は本当の天使なんじゃないからね」最後の一言はトナが期待のような表情を向けたからだ。

「ちなみに言うよね、エンジェルのが強いよ、爆弾みたいの投げてきたでしょ、あれにあたると死ぬの。あんたには関係ないみたいだけど」

「嘘でしょ、簡単に死んだのに」口を開けて言う。

「今、殺したって……」

「うるさいよ。お前は黙ってな」マーヴェラが冷たい声で言う。トナはすぐに口を閉ざした。

ベラははあ、とため息をつくと言った。

「もう二人とも黙ってて、質問はあとで聞くから」

「はいはい」マーヴェラは面倒臭そうに答える。一方、トナはキツチリと答える。

「分かったわ」

悪魔2

「それじゃ、始めるよ。エンジェル・ルリクルビが持ってた、丸い物を私に投げてきたの。それで逃げただけだけどそれが何か気になって触ろうとしたら、誰かの声が聞こえた、近づくな、って最初は誰だか分からなかった。でも、その声は私の頭のなかで響いてた。その声は私の中に居る、火って言う声だったの」

そのときトナは何か言いかけて止めた。ベラが質問は後だと言ったからと明らかにマーヴェラの舌打ちが聞こえたからだ。

「助けてって言ったら、助けてくれた、私の体を貸す条件で。火事の一件は私のせいだけど私だけのせいじゃない。火は私の体を支配して、悪魔を塵にしていた。でも、悪魔が逃げたのよ。あとは一緒よ、殺して、火事になった」ほとんどを省略した。それは面倒臭いとかではなく、自分でもあれを説明するのは無理だからだ。

「いいよ、質問して」短く言うともマーヴェラが声を出した。

「ベラ、あんたの中に火がいるのね？」

「ええ」

「それならいいわ」安心したみたいだ。「後は何処か痛くない？」

「別にどこも、痛くないけど」どうしてそんなこと聞くのかわからないみたいだに答える。

「そう」

「トナは何かある？ さっき質問したかったみたいだけど」少しニヤニヤしながら聞く。

「いいえ、何もないわ」静かに言う。

ベラは冷静なトナに驚いた。こんな話して、叫んで質問攻めにされるのではないかと考えていたからだ。

「まあ、いいや」

「ねえお腹すいたでしょ。冷えたものを温めてくるから待ってて」トナが立ち上がりながら言う。

「分かった」

2〜3分間の沈黙が続いた。マーヴェラは一切しゃべらない、もう寝てるのではないかと思ったが、違うことは分かっている。

下からトナの鼻歌がチラチラと聞こえる。

それは突然聞こえなくなり、トナはベラを呼んだ。

「ちょっと来て、ベラー」

こんなに早くはできないだろうと思い、ああまた火か、と呟いた。

「わかった！」

トナに返事を返すと、マーヴェラに話しかける。

「マーヴェラ、待っててね。まあ寝てもいいんだけど」

「いや、起きとくよ。私も連れていってくれるかい？」

少し意外だった。この部屋からは出ないと思っていたからだ。そう思ってしまったのは、どこかの物語でそういうものがあつたからだ。物語とはそんな都合よく一緒じゃないよな、と心で呟いた。

「分かった、行こうか」ぎこちなく笑顔を作る。

少し自分が嫌になった。

自分が期待していたことを知ったからだ。

「あら、マーヴェラも連れてきたのね。ささっ早く火を付けて」手招きをしながら言う。手にはマッチ箱がグシャグシャになって握られている。今思えば、マッチが悪いのではなく、トナのすりかたが悪いのだ。

「もうマッチ買ってこなくていいよ」ため息混じりに言う。

「よかった、マッチ代が減らせるわ」ベラとは裏腹に元気に言う。

ため息をはき、手を着火マンのようにし火を着ける。

「じゃあマーヴェラと話してるから」逃げるように部屋の中央にあるテーブルの椅子に腰掛けた。本と向き合い、話しかけた。

それから直ぐに温め終わった。

食べ終わると同時に激しい眠気に襲われる。おぼつかない足取り

で本を片付けるために書斎に行き、マーヴェラにおやすみを言う。
そしてまた同じことを約束される。明日も来ること。
そして直ぐにベットに入った。

行方不明者

次の朝、ベラは外の騒ぎに起こされた。その騒ぎはだんだんと大きくなる。

何て言ってるかベラはやっと気づいた。

それは、

「ベラを出せ」と言う町の人々の声だった。

そしてトナが、

「何ですか！ 朝から騒々しい！」

ドアを開け、思い切り叫んだ。

「ベラを出せ！」

一同は気持ち悪いくらいに声をそろえ言う

「だからなんなんですか！」

躍起になってまた怒鳴る。

「いいから、ベラを出せ！」

これでは何を言っても聞かない。トナは人々の顔を見た。憎しみと怒りがあらわになっている。どうして来たかなんて、言われなくても分かっている。だが、叫ばずにはいられない。

「お願いだトナ。ベラを出してくれ」トナのお父さんが前に出てきた。

「パパっ、これはどういう事！ 話して」

「落ち着けトナ、言わなくても分かっているだろう？」

トナは黙って頷いた。だが、手のひらを強く握り締めた。

「今連れてくるわ」

「私ならここに居るよ」怒りをそのまま声にしている。

ベラが階段から降りてくる。その顔を見ると父親の顔が怒りに歪んだ。

「なんでいるんだ？」

「昨日の火事の事とお前の暴走のことだ」ベラを指差し言う。

「そうだ」後ろの人々が声を合わせていった。

「暴走？ 何のこと？」ベラはとぼけた。あれを見てない人など、いるはずがないのを知っていてだ。

「とぼけるな！ お前が暴走したせいで町がめっちゃくちゃだ！ 火事で助かった人は、家を失くし住む場所もない、家族を亡くした人だって大勢いる！ 行方不明者だっている！ どうしてくれるんだ！」

顔を真っ赤にしながら、叫ぶ。

「家を失くした人が居るなら残ってる家に住ませればいいそれで、また家を建てればいい！ それにね……」トナが、続きを言おうとしたらベラに止められた。

「言うなよトナ。あの事は」その声は人のことを脅す声だった。

「何で私だと思うの？ 個人的な理由じゃなくてちゃんとした理由で言って」聞かなくてもわかるけど、と心で呟く。

「お前が火をつけるのを大勢が見た。どうやったかは分からないが火を操ってな」

「見間違いないの？」

「確かにオレは、見たんだ。お前が火を手から出して家に向かって火を出すところを」前に居た男が全員に聞こえるように声を張り上げる。

「オレも見た！」

「私も」

次々に見たと言う声がした。

返事をしようとベラが口を開くと同時に女の人の大声がした。

「人殺しっ！！！」

怖いくらいに憎しみのこもった声だ。

「キーチ？」

トナが女の人の名前を言った。

「サニーニャのお母さん！？」

驚きを隠せない、とても優しくしてくれたサニーニャの母が、と

てもほんわかとしていてゆったりとした雰囲気のある人が、こんなにも禍々しい殺気のようなモノをだすとは、思ったことはなかったからだ。

「あんたでしょっ！」

サニーニヤのお母さんがトナのお父さんを押しつけベラの胸ぐらを掴んだ。その顔はやつれていて、目の周りが赤い。ずっと泣いていたのだろう。

ベラはその顔を見れなかった。

「何が？」

この家族に何もしてないし、何かしようとも思ったことはない。

「とばけないでっ！ あんたがサニーニヤを、サニーニヤを殺したんでしょ」

お母さんは泣き、体を激しくふるわせている。

「私が……」唇を噛み、続きを言う「サニーニヤを殺すわけがないでしょ、友達なのに」

「じゃあ、何で帰って来ないの？」

即答だった。

「……」悔しそうに唇を噛み締める。それを言われては何も言えない。頭が真っ白になった、何も考えられない。

「私は町中の人に聞いたのよ」胸ぐらにあった手を離し、絶叫する。「でも、みんなわからないって言うのよ！ そしたらこの人があんたに殺されたんじゃないかって」隣にいる男の人を指さす。

「他の人はあんたの近くに居たって言ってたのよ。どうして、どうして殺したの。サニーニヤはあんたと友達になって喜んでたのに、病気だって前は治そうともしなかったのにあんたと会って、サニーニヤは治そうとがんばってた。あんたは知ってたでしょう、サニーニヤがもう永くないって、サニーニヤから聞いたでしょう。なのに何で殺したの！ 後2〜3ヶ月よ、全然長くないじゃない。死んで欲しかったなら、待っててくれればよかったのに！ なんて、なんで殺したのよっ！ 返してよ、返してっ！ あんたと会わなきゃサ

「ニーニヤだってもっと生きてた！返してよっ！」

お母さんは泣き崩れた。我慢していたものをぶちまけたのだ。

「ああああああああああああああああああああ」ベラは、叫ぶと頭を抱え自分の部屋に走った。

会議

真っ暗なルーアランダに明かりがひとつ付いた。教会の屋根裏だ。

そこは会議に使っている場所で、集まるのは決まってトナお父さん、一番の知識人、一番の金持ちシャン・バリカの三人だった。

今日は、昨日のことを話すために集まったのだ。

「他の村にこのことが知られてはだめだ。この村には悪魔が必要だ！」

トナのお父さんが言った。

「そうだな。でも、誰がやるのだ？」

声がしゃがれている男が言う。

「決まってるだろう。ベラだ！」

シャン・バリカが言った。当たり前だろうと鼻をフンッと鳴らした。

「あいつがやると思ってるか？ やるわけ無いだろう！ それにあれはどこかにやったほうがいい。本物の悪魔だ」一番の知識人が反論した。

「そりゃあ、やるとは言わないだろう。勝手に決めればいいだろう。それに今ここから出したら世界が滅んじまう」

「……それもそうだな」納得したように頷く。

「それではトナにも危害が加える事になる」

お父さんが心配そうに言った。お父さんは決してトナのが嫌いだではないのだ、本当は一緒に暮らして、一生見守りたいくらいなのだ。

「それじゃあ、こんなにめちゃくちゃにしたベラを悪魔じゃなくするのか？ トナはお前のかわいい、かわいい娘なのはわかる。だがベラは悪魔にする！ それにな、トナが大事で危害を加えたくないならトナとベラを引き離せばいいだろう」説得力のある声色で言う。「お前が言いたいのは、ベラを捨てろということか？」

「まあ……悪く言うそうさだ」気まずそうに肩をすくめる。

「それでは神がお怒りになる！」お父さんは席を勢い良く立つ。
シャン・バリカも勢いよく立つ。

「何を今更！ 神だと！ あいつは悪魔だぞ！ 神がべラはどうした、と聞いて、捨てましたと言ったら神は喜ぶぞ」

「そうかもしれないが、どうやればいい？」

仕方なさそうに椅子を直し座る。

「トナは独身だよな？ もうそろそろ結婚してもいいはずだ」立つ
たまま言う。

「ああ」何を考えているかわからないというように頷く。

「それじゃあ、オレの息子にトナをくれ」

「うーむ、いいだろう。だが、その息子がトナに危害を加えるようだったら、ただではすまないぞ」眉間にシワを寄せ、脅すように言う。

ペラは・・・(前書き)

編集中です

ベラは・・・

トナのお父さんたちが会議をしてる時、ベラは部屋で絶望と怒りに浸っていた。

サニーニヤが死んだ、絶望。人々への怒り。

また涙の出ない自分への絶望と怒り。

そして何よりも自分が期待していたことにも絶望と怒りを感じていた。

彼女は前から知らぬまに期待していたのだ。この頃、薄々感じていたのだが気づかないフリをしていた。

自分が火を操れるのは人のことを守るためで、本の主人公みたいにつか人に認められるような日が来ると期待していた。それが昨日だと期待していた。だが、現実は違う。いつも以上に人々の目が冷たく、

もうなんかやる気力が無い、いつそ死んでしまおうか、たった一人の友達にまた会える。いや、あいつらから見たら、もう死んでも同然か私は要らない者だもの。

でもあいつら、私がサニーニヤの事殺したって言った。

バカだなあいつらも、私が殺す？ サニーニヤを？ いつもの私達を見てなんでそう思えるの？ それじゃあ誰が殺したの？

突然、ベラの脳裏を横切ったもの。それはサニーニヤが悪魔に心臓を貫かれるところだった。

悪魔だ！ でもあのときのサニーニヤの反応は、転んで傷が出来たくらいの反応だった。

あの時、私はだから逃げたと考えた、でも違った？
あの時殺したのか。

でも、じゃあ遺体はどこ？ あの時火が塵にした？

いやでも、もしかしたら悪魔が連れさらった？ そしたら1／2匹悪魔を逃した事になる

連れさらったと考えるとその悪魔は相当早いか、空にいた悪魔かどうかだ。

だったら、まだ生きてるかもしれない。マーヴェラに聞いてみよう
すぐにベラは、物音をたてないよう気を付けて書斎まで行った

「マーヴェラ、起きて。聞きたいことがあるの！」

「なに！」

「悪魔ってさらったりする？」

「うゝん悪魔が人をさらって生きて帰って来ることは聞いたことが
無い」

「それじゃあサニーニャは、帰ってこないって事、じゃあ死んだも
同じ、ね」

ベラは・・・（後書き）

自分で書いてて
ちよつと混乱したので
皆さんに伝わるか
心配です。

結婚相手

会議から一週間、あの男の息子がトナのお父さんと一緒に来た。

トントン・・・

「はーい」

「トナ、おはよう」お父さんが言った。

ボタン！勢い良くドアを閉めた。

「いいの？トナそんな事して」

「いいの！ベラ！何の用かしらこの前あんな事したのに！あんな爽やかにトナ、おはようだって？バカにもほどがある！こっちはまだイライラしてんのに！ベラだって今じゃあ、外に出れないのに」

トントン・・・

「何のよう？パパ」

「開けなさい！」

「開けてあげるけど、まず用件を言って！」

「紹介したい人がいる」

「わかったわ」仕方なく、言う続けて忠告した。

「でも、ベラに手を出さないでよ。連れて行こうとか 殺そうとかしたら私があんたら殺すからね」トナは、この頃ナイフを持ち歩くようになった。あの騒動の後、買い物に行ったら殺されそうになったから。

でも、こんなものは持っていたくなかった。トナは仮でも母親であり牧師の娘だ。牧師がこんな物持ってるなんて少し恥じていたが、ベラと自分を守ってくれる物なので仕方なく持っている。

「わかったから開けなさい」

「はいはい。紹介したい人って？」

「この人だ。トナ、お前の結婚相手、ジリアン・バリカ」

トナのお父さんの隣には、トナの頭一個分大きい男の人がいる。

その人は無表情に後ろのソファ―に座っているベラを観察するよう
に見ていた。

その事にトナはすぐに気が付いた。

「パパっ！今、結婚相手って言った？この人誰？私、知らないわ」

「この人は、シャン・バリカの息子だぞ」

「あああの人、私嫌いよ。でも、初めまして」

「初めまして」そっけない返事が返ってきた。

「座っていいのよ」

「はい」笑顔で答えた。

トナは、一瞬彼の笑顔に見とれたがさっきのベラを見る目を思い出し、

「こいつも敵だ」と誰にも聞かれない声で言った。

嫌い！

ジリアンは、挨拶をしてちょっと話ただけで帰ってしまった。
トナとお父さんは、その後ももめていた。

「トナ、ジリアンはシャンとは違う。いい奴だぞ」

「だから何よ！あいつの息子に変わりは無いでしょ！」

「そうだが・・・」

「あいつの息子なら1つや2つ似てるところがあるでしょ！私はあいつのすべてが嫌いなのだ！」

「なぜそんなに嫌う？」

「いいの！とにかくあいつは嫌いよ。パパ、ジリアンに言っ
てね。私は、あなたのお父さんが死なない限り、あなたと付き合っ
たり、結婚したりいたしません。」

「お前という奴は！いつからそんなになった。」

「パパがベラを嫌ったとき、私もパパが嫌いになったのよ！帰っ
て
パパ」

「さよならっ。お前の言葉はちゃーんと丁寧な言葉で言ってやるか
ら安心しろ」

ボタン！

告白

次の日

トントン・・・

「はーい。ちょっと待ってくださーい」
ガチャッ

「ジリアン？あなた、昨日私のパパから私の伝言聞かなかった？」
「聞きましたよ。」

「じゃあ、何できたの？」

「あなたは来ないでと言っていないでしょ？それに私は、あなたにひと目ぼれしてしまったようだから付き合ってほしいと思って」

「・・・」

「だ、めかな？」

「ええ、だめ！」

「なんで？」

「あんたのお父さんが嫌いだから、伝言にあったでしょう。」

「ああ、あったよ。」

「じゃあ分かったでしょう。ふられるって」

「ううん分からなかった。だってあなたは、僕の父が嫌いで僕はどちらでもないでしょ？」

「そうだけど・・・」

「ね、そうでしょ。だから僕と付き合ってよ」

「わかったよ」ちょっと仕方なくという感じで言った。

ジリアン

ジリアンの告白から3週間。

家は、ほとんど机に1個花瓶があるくらい花でいっぱいになった。

「トナ、あのさく花いくら好きだからってこれはないでしょ。」

「私も思ってたわよ！あいつまるで子供なのよ！」

「言えばいいでしょ！言えないんだったら私が言うけど」

「いいわよ。私があんな事言ったからこんなになったのよ。」

「何て言ったの？」

「私花が好きだから今度持ってきて来て！って言ったのそしたらいつも持ってきて来るようになったの」

「・・・トナのせいかな」

トントン

「来た！」

「トナー」ジリアンは勝手に入ってきた。

「花そんなにいっぱい」今日の花は、100本近かった。

「うん」

「花瓶用意しなきゃ」

「花瓶もう無いんですよ。買ってきたよー」

「ありがとう」

「どういたしまして」

「べらー早く寝なさい」

「はいはい」

「あのさトナ。」

「何？」

「ベラを、学校に、い、かせ・・・ないか？」

「何言ってるのよ？」

「大丈夫だよ。ちゃんとしたベラのような人が行くような学校だから」ジリアンは、にっこりと笑って言った。

「それにお金は、僕が出すよ。ねっベラが学校に行ったら僕たち一緒に暮らそう？」

「あんたも、みんなと同じ・・・」トナは、小声で言った。

「えっ？」

「あんたもみんなと同じね。でも、あんたは、もっとたちが悪い！あんたはお金でなんでも出来ると思ってる！あんたのお父さんと同じ。私がなんで最初付き合うのを、拒んだか分かる？あんたは、顔もいいし、お金もいっぱいある！でも私は拒んだ、何でか分かる？あんたが、私の嫌いなあんたのお父さんの性格を受けていると思ったから！私の思った通りだった。それにベラの事最初あんた、どんな目で見てたか、あんたの目はみんなと同じ目だった。」

「・・・」

「どうせあんた、私のお父さんに言われたんでしょ！ベラと私を引き離せて。それにね、あの時パパが来ること事態おかしかったのよ！」

「・・・」

「出てって！」

「えっ!!」

「出てって。二度と顔見せに来ないでよ！」

ボタン！

引越し前

次の日、トナは何か準備をしていた。

ベラは、眠たそうに聞いた。

「トナ、何してるの？」

「引越しの準備よ」

「へっ!？」

「ほら! あんたも準備して!」

「何で引越しするの? ジリアンは? トナのお父さんは? どうするの?」

「ジリアンとは、別れたわよ。」

「何で? トナとジリアン一緒に居た方がいいと思ったのに。」

「あいつの事私は、いつ好きって言った? あいつが一方的に好きって、言ってきたのよ。それに、あんたの事あいつは嫌ってるのよ。なのに、私があいつの事好きになれると思う? なれないわよ」

「ジリアンが私の事嫌ってるの知ってた。でも、こんな私でもトナに幸せになって欲しいと思うよ。だから私は、ジリアンと結婚したら迷惑にしかないからどこかに行こうと思ってた。」

バシッ

トナは、ベラにビンタをした。

「ごめんね。そんな事考えさせてたなんて私、知らなかった。でも、あんたは捨てないから大丈夫だからそんな事思っちゃだめわかった?」

引越し

それから準備は着々と進み、トナは近くの馬車を借り来た。その後、ジリアンが来た。

「トナ」

「あんたなんで来たの？」

「えっ、だって近く通ったから」

「それだけ？」

「うん。そういや、何してるの？」

「あんたには関係ないわ！」

「関係ないけど知りたいから。ねっ教えてよ」

「引越しよ！」

「どうして？」

「ここから離れるためよ！ここには、信じられる人がいない。パパだって悪人よ！」

「そう・・・じゃあもうバイバイ？」

「そうバイバイよ！」

「どこに行くの？家決まってる？」

「えっ！！ううう、きま、ってな、い」トナは、弱く言った。

「うそっ！！決まってるのに引越しの準備したの！！」

「やっぱり。だって昨日の夜、君が怒って僕の事追い出してから家探す時間無いよね。」ジリアンがトナを見た、トナはジリアンをキッと睨んだ。

「ああ、ごめんごめん！僕の知り合いが今、モノエルのスノアークスに居るんだ、そいつ今いい家があるってうるさいんだ。僕が手紙書くから渡して、そしたら多分その家くれるよ。ちょっと待ってて」ジリアンはそのまま走って帰った。

それから5分

「あつごめん、こんなに書く事があるなんて思わなくて」

「何書いて来たの？」ベラが聞いた。

「えっ決まってるじゃないか。悪口だよ」笑いながら言った。

「思ってたんだけど、お金はどうするの？」

「僕が払うよ。ねっお願い」

「いいよ」ベラが言った。

「バカ、ベラそんなの駄目よ」

「なんで、ジリアンお願いしてるんだよ。お願いは聞くものでしょ」

「トナお願いだよ僕払いたいんだ」

「じゃあお願いね。でも、少しでいいのよ」

「うん。少しね」

「じゃあね」

「うん、じゃあね。あつそうだお父さんに言った？」

「言っていないわよ。言う必要は無いもの」

「なんで？」

「知らせたら、止めるかついて来るかするもの」

「でも、知らなくて家がもぬけの殻だったらビックリするじゃないか」

「いいの」

「でも、お父さん君の事すっごい大切みたいだよ。だって僕が初めて君の家に行く前に言われたんだ。

もしお前がトナと付き合うとするトナを傷つけたらお前、ただじゃあおかないからなって脅されたよ。多分君が突然居なくなるとショック死しちゃうよ」

「パパからそんなこと言われたの」

「だからさあ。言わなくてもいいから手紙でも書きなよ。僕が渡すからさ」

「じゃあ書いてくるわ」

「まだ行かないんだ」ベラがあきれたように言った。

5分後

「ごめん。結構書いて来たの」

「何書いてきたの？」ベラがジリアンに言ったように言った。

「感謝の言葉」

「ふーん」

「じゃあ渡してね」

「うん」

「これで本当にさよならよ」

「じゃあね。ついて、友達に手紙渡して、うまくいったら手紙ちよ
うだい」

「うんバイバイ」

トナは、馬車に乗って窓から顔と手を出し手を振った。

引越し（後書き）

今日は、長く書きました。
クロワッサンさんありがとう

これまでの登場人物

ベラ・ハウゼス

火を操れる。誕生日4月16日。髪が茶色、目も茶色。性格、大人にはちょっと反抗的（トナ以外）
実のお母さんに捨てられ、トナに拾ってもらった。

トナ・ハウゼス

誕生日9月6日。目が黒、髪が茶色。
性格、言いたいことはすぐに言う。
ベラの事を拾って、育てた。

クリス・ハウゼス

誕生日3月9日。目が黒、髪も黒。
性格、一途。
ベラの事を悪魔だと思ってる。

マーヴェラ

謎だらけの本。
予言者

ジリアン・バリカ

誕生日11月8日。目が茶色、髪がクリーム。
性格、子供っぽい、お金で何でも出来ると思ってる。
みんなと同じ、ベラがあんまり好きじゃない

サニーニャ・バンクス

誕生日8月17日。目が黒、髪が茶色。

性格、明るくて、平和主義者。

ベラの事が大好き。

悪魔

種類2つ、飛んでいるのがエンジェル・ルリクルビ。歩いているのが、デビル・ビルクリル

これまでの登場人物（後書き）

批評・いい所・誤字などなんでもいいです。
感想などくれたら絶対、返信します。

モノエルのスノアークス

モノエルのスノアークスには、ルーアンダから出発して3週間後に着いた。

ベラ達はジリアンの友達を探すために、市場に行きいる場所を聞くというろんな人に尋ねた。

すると、大きな男が

「その人なら森の近くにいますよ。行けばすぐに分かる森の近くに家を持つてる人はいないからね」

「ありがとうございます」トナは頭を下げ言った。

森の近くに行くと、そこには一件しか家が無かった。

コンコン

「はいなんですか？」出てきたのはベラと同じくらいの女の子だった。

「あのーここにルーン・ユーロさんいますか？」封筒にあった名前を言った。

「あっパパ？いるよちょっと待ってて」

「パ〜パ〜」

「なんだい？」

「お客さん」

「どなた様ですか？まあその答えは家の中で、どうぞお入りを」

「はあ」

家はすごく綺麗だった。

「で、どちら様？」

「私は、トナ・ハウゼスと申します。この子はベラ。私たちはクイルのルーアンダから来ました。ジリアン・バリカと言う人からここ

に来ればあなたに会えるという事で来ました。ジリアンから手紙があります、まず読んでください。用件が分かるでしょうから」

「これが手紙か、なんか嫌な予感がするよ」

「はあ、ジリアンらしい書き方だ。あなた達に家をあげろと」

「・・・」

「まあ、いい所があるのでいいでしょう。ついて来てください」

そこは、ベラ達が来たところから遠く市場に近い家だった。

「ここです。ここは市場に近いですし日当たりがいい、すごく良い所ですよ。どうですか？」

「ここがいいです。日当たりが良いなら野菜が良く育つし」

「それでは、ここで決定です。手続きを済まして来ますので荷物などを整理して置いてください」

サナ・ユーロ

手続きが終るとルーンは町を案内してくれた。

町の案内が終ると、ルーンは家族を紹介してくれた。

「この子が私の娘のサナです」さっきドアを開けてくれた女の子だった。

「よろしく、トナさんえ」と・・・」

「あっベラよ」ベラ本人は何も言わないのでトナが代わりに言った。

「よろしく、ベラ」

「・・・」

「こら、返事をしなさい！」

「はいはい、よろしく」素っ気無く言った。

「ごめんなさい」

「良いんですよ。私もこのくらいの時初めて会った人には、同じ様な態度をとっていた」ベラはその事を聞くと少しイラッときた

「この人が僕の妻のヘルです」

「初めましてトナさん。分からない事があったら聞いてくださいね」やさしくヘルは言った。

「ありがとうございます。それとトナで良いですよ」

「そうですか」

「トナ、今日は一緒に夕飯を食べない？それにもう夕方だから市場はやってないわ。食べ物はあるの？」

「良いんですか、それじゃあお言葉に甘えて」

「よかったわ。それじゃあ夕食の準備をするので座ってて、サナ、ベラと遊んでなさい」

「それでは私は、仕事があるので」

「はい、それじゃあ私の部屋に行こうかベラ」

「ヘル、手伝うわ」

「いいわよ」

「食べるだけなんて申し訳ないわ」

「そう、じゃあご飯頼める？」

「いいわよ」

「ベラ、何して遊ぶ？」

「何でもいい」

「そう、じゃあ話でもしよっか」

「何話すの？」

「いろいろ。ベラ前どこに住んでたの」

「ルーアンダってとこ」

「じゃあ、友達いっぱいいたでしょ、別れるの辛くなかった？」

「辛くないよ」

「なんで？」

「私の友達是一人だけ、そのこは殺されたから友達はいなくなった」

「誰に殺されたの？」

「知らない」ベラはうそを吐いた。

「悲しかった？」

「悲しかったに決まってるでしょ。あんたは友達いないの？」

「いない、ここは森の近くでしょ、だれも近ずかないの」

「どうして？」

「熊とかが出るから」

「出た事ある？」

「あるかな？一回だけ家の窓においてあったハチミツがある日、無くなって窓も割られてたしでも、泥棒かも知れないからなんとも言えないけど」

「じゃあ一応安全じゃない」

「まあね、でもみんな怖いのよ」

「私と一緒にね」

「えっ、何話して！」ボソツと言ったつもりなのに聞こえていた。

「ルーアンダから出てきたのは・・・」

「ご飯よー降りてきてー」

「はい。行こっか」

「うん」ベラは、さっきの話をしなくていいことに安心していた。

サナは聞きたかったが、ベラが話そうとした時、とてもつらそうな顔をしていたのでやめた、それに初めての友達を失くしたくなかった。

質問

ご飯は、パンにクリスマスに食べそうなかいかいチキンとスープ。スープはトナが作り、パンはヘルが作ったチキンは2人で作った。食べているとき、2人でお互いを褒めあっていた。

「トナ、このスープ美味しいわ、食べた事の無い味ね。今度作り方教えてね」

「良いわよ。でも、ヘルのパンの方が美味しいわ、作り方教えてね」「いいわよ、簡単に出来るわよ」

ベラとサナは、あんまりしゃべらなかった、ただ「おいしいね」とか一言しゃべるだけだった。

ルーンは仕事があるので少しして来た。

みんなが食べ終わると、トナとベラに質問が来た。

「何でこっちに引越してきたんだい？」ルーンが質問した。

「みんなこの子の扱いがひどいし、信じれる人がいないから」

「君の両親は？」

「お父さんはルーアンダにいるわ、置いてきたのよ。お母さんは死んでしまったの」

「なんで置いてきたの？一人で大丈夫なの？」ヘルが質問した。

「さっき言った通り、みんな信じられないのよ。お父さんだってその中の一人よ。それに元気だから大丈夫よ、後長くて50年は生きるわ」

「でも、なんでベラは嫌われてるんだい？こんなにかわいいのに」

「それは・・・その・・・」

「あつ、言いたくないなら言わなくていいんだ。すまないね」

「良いんですよ」

「そういえばベラとトナって似てないよね！どうして？」サナが不思議そうに2人の顔を見ながら言った。

「ベラは私の子じゃないですよ。教会の前に捨てられていたのを見つけて拾ったの」

「へえ、捨てるなんて酷い事する人だね」

ゴーン　ゴーン　ゴーン　ゴーン　ゴーン　ゴーン　ゴーン　ゴーン

8回時計の鐘がなった。

「もう8時！？ごめんなさいこんなに居て帰りますね」

「ああいいんだよ。でも帰っちゃうのかい？」

「はい。準備もあるから」

「そうか、じゃあ送るよ」

「それは助かります！」

「それじゃあ行って来るよ」

「気をつけてね、パパ」サナの声は心配そうに言ってなかった。

整理

「ありがとうございます」

「良いんだよ。それじゃあね」

「さよなら」

「ベラ、さようなら」

「さよなら」ベラは素っ気無く言った。

「ベラなんであんな態度とるの？」

「あんな態度って？」ベラはしらばっくれた。

「ベラっ!!」トナは怒ってた。

「はいはい。しょうがないでしょ、悪いと思ってるから。それじゃあ部屋の掃除しよう」理由を話さずにこの話を終えようとした。

「そうね。でも、必ず理由を言ってるね」トナはしつこく聞かなかった。それには理由がある、聞いてもベラが言おうとしないのはいたくなからだと知っていたから。

「で、部屋よ自分たちの部屋決めなきゃ」トナが言った。

2人は、二階に上がった。部屋は三つあった。

「じゃあ、私ここ」ベラが選んだのは、左側の部屋だった。

「じゃあ、私は真ん中で書斎があっちね。これで決定。自分のベット運ぶわよ、最初はあるから」

階段は狭くてベットを横にしてギリギリ上に持っていかれた。

「これでよし!あと私の」

2人のベットがようやく部屋に持ってかれた。

「他は明日で良いでしょう。それじゃあ、お風呂やって入ったら寝ようか」

「うん。分かった」

お風呂は凄かった。

ルーアランダの時の倍はあった。

でも・・・

「凄い、前より大きい」

「そうだね」

「じゃあベラやっというてね私、整理するから」

「いや、私が整理するからトナやっというてね」

「ベラやってね」

「トナやってよ」

「私やだよ」

「私もやだ」

「何で？」

「多分同じ理由だよ」

「じゃあいつせいのせで言おうか」

「汚すぎる!!」

「汚すぎる!!」

「同じだね」

「じゃあ、2人でやろうよ」

「そうね」

お風呂はすごく汚かった。

洗っても洗っても落ちない汚れはほっというておく事にした。

「なかなか落ちない」

「もつとがんばればいいのよ」

しばらくすると、

「はあもういやっ」ベラは、大の掃除嫌いであり大の気分屋でもあった。

前の掃除の日は掃除する気分だったのでやった。

「がんばってよ! 楽しくないの?」

「そう言うトナは?」

「楽しいわよ」

「そう、じゃあ私は・・・」ベラはお風呂場から出ようとしながら

言った。

でも、言い終わる前にトナが

「ダメよ！やらないんだったら、お風呂入らせないから！」

「それは嫌だ！わかった、やるよ」ベラは、しぶしぶ言った。

それは、ここ3週間ともに風呂に入っていないから。

たまに、宿に泊まってお風呂に入ったが、無いところもあったし、3〜4日前から髪だけしか洗ってない。

掃除がやっと終わった、トナはお湯を入れすぐにベラと入った。

「はあ〜やった！」

「そうね、ちゃんと体洗わないと」

お風呂が終るとベラはすぐに寝てしまった。

トナはジリアンに手紙を書き、すぐ寝てしまった。

夢

次の朝、ベラは一番早く起きたのでマーヴェラの所へ行った。でも、マーヴェラは怒っていた。

「よくも、こんなところにほっといてくれたわね！それに1回も顔見せないで私心配したのよ」マーヴェラの言葉にベラは驚いた。マーヴェラがお母さんみたいなことを言ったから。

「ごめんなさい。でもしようがなかったの」

「しょうがないって何が？」

「引越して、他の人もいた。話してたらあんた今頃ブラックマーケットの棚の中だよ」

「そんなのトナと話してるみたいに言えばいいじゃない！それに私は一応聞こえない魔法使えるんだよ。言ってくればやってあげたのに」

「はあ？魔法が使える？バカなこと言わないでよ」

「じゃあどう説明する？あんたが火を使える事。前に私が言った事覚えてる？」

「教会の事？」

「そう、それ！ちゃんと覚えてるみたいだね」

「それが？」

「＜プリーヂモ＞は魔法が使えるの」

「へえ」

「へえ！ってなによ。もっと驚きなよ」

「驚く事なんかない、最初は驚いたけどもうなんかバカらしくなっちゃって。」

何もかもがおかしいわ」

「ベラ？そういえば今日来るの早かったね。なんで？」

「夢のせいだよ」

「夢？もしかして」マーヴェラは息をのんだ。

「そうだよ、そのもしかして。いつも夢に出る、サニーニヤが。夢はいつも同じ海でサニーニヤと私は遊んでる、でもいつしか気がつかないうちに地面に黒は染まって空は白に染まって、世界が白黒の世界に染まってしまってもみんなは気づかない、私が知らせようとすると空と地面が不気味な声で笑って邪魔をする、白の空と黒の地面から悪魔が出てきてサニーニヤの心臓に槍を悪魔全員で刺す。サニーニヤは叫んで私に向かって、助けてって言ってる。それから口から血を吐き出してそのまま死んでしまう。私はどうする事も出来ない」一息つくともた話し始めた。

「私が悪いのは分かってる、でも私は怖い。多分サニーニヤは気づいてる天国で私の事恨んでる、それに約束も破ったサニーニヤはいっぱい泣いてって言ったでも全然泣けない」

「ねえベラ、悪いって何が？」マーヴェラは優しく言った。

「私がいるから悪魔が来るの。私さえいなければサニーニヤはもつと長く生きていたし、ルーアンダも普通の毎日だった、それにトナだって、トナは何もかも私のために捨てたの。お父さんも、結婚も、家も。私がいるから」

「悪魔があんたのせいで来るって誰が言った？」

「火が」

「まあ、ほんとうにあんたのせいだけど、あんまり重く思わないほうがいい。それにサニーニヤは多分あんたを恨んでないしトナだって恨んでない絶対！トナは本心で捨てたの！」

「そう？私はどう思う」

「それはただの勘でしょ。そんな事に頼ったってこの事はどうにもならない！分かった？」

「・・・分かった」

「はあ、疲れたもう寝るから」

「うん、じゃあね」

市場

ベラはマーヴェラに話してスッキリし、とても眠くなってまた眠った。

でも、何度か起きてしまうこともあった、それでもまだ大丈夫かと眠っていると、

「ベラ。早く起きて」トナが起こしに来た。

「はいはい！」

しぶしぶうなずきながら言う、すぐにぶつぶつと小言言い始めた「ふん、何にも知らないくせに」

「ほらいいからぶつぶつ言ってるで、買い物行くよ。市場は1時までしかやってないの」

「そんなのまだまだじゃない」

「何言ってるのよ、何時か時計見てみ」

ベラはとてもビックリした、7時くらいだろうと思ったのにもう11時になっていたのだから。

「うっそ」

「私もうっそだよ。早く行くよ、もう新鮮な物無いかもしれないじゃない」

「何で一人で行かなかったの？」

「私も寝てたのよ」ちよつと申し訳なさそうに首をすくめ言った。

「そう、それじゃ人の事言えないね。行くよ」

ベラは外に出ると辺りを見渡した今日はいいい天気だ。

昨日、ルーンに町を案内されていた時はずっと下を見ていたのであんなまり気が付かなかったけれど、この町はとても綺麗だった。

ルーアンダは低い建物ばかりでどれも壁が黒っぽかったし、教会は中も汚くて蜘蛛が巣を作っていた。でも、スノアークスは壁も真っ白で教会は外も中も綺麗だった、あっちとは全然違う、正反対だ。

市場に着いた。

市場は魚臭かった。

ここもルーアンダとは違う。

こっちはとてもにぎやかで奥に行くともみんなが踊っていたし、料理も食べれた。でも、あっちの市場はにぎやかでも何でも無かった。ただ、「安いよ」とか「このフルーツはうまいよ」とか言うてるだけで料理とか踊りとかはしなかった。

ベラはここを気に入った。

どんちゃん騒ぎでとてもルーアンダとは比べ物にならないくらい居心地がよかった。

その時、ついさっきまで踊ってた小太りのおじさんがベラに話しかけてきた。

「ねえちゃん：ヒック：も踊るか？」手を差し伸べてきた。

多分、この人はお酒を飲んでる。結構いっぱい。

でもそんな事関係なくベラは、

「うん」と返した。

ベラはとても嬉しかった。こんな事言ってくれるのは「火」のことを知らないからってのも分かっていて、それでも嬉しかった。この人がベラを見る目は普通の少女を見るやさしい目で、ルーアンダの人たちの目は怪物を見るような冷ややかな目だった。

ベラはこんな人たちを一瞬でとても好きになった。

その頃トナはベラが踊ってる近くでヘルとサナに会っていた。

サナはベラが踊ってるのを見て即座にベラの所に行ってしまった。

ヘルはトナと話してる。

「楽しそうですね」

「そうですね。ベラがあんなに楽しそうな顔してるの初めて見ました。ルーアンダでは道や市場を歩く時いつも無表情ですし、みんながベラを見てる目は冷たい目でしたから、笑うにも笑えないんですよ」

「そうなんですか、それは可哀想に」

夢

トナとベラの買い物が終わるとサナが、

「家に来ない？」

と誘ってきた。

「トナ、行って来て良い？」

ベラがトナの顔を見上げ言った。

「いいよ。行ってきな」

「よし。じゃあ、行こうか。ベラ」

「うん。それじゃトナ行ってくるよ」

「日が暮れる頃には帰ってきてね」

「わかった」

そういうと、ベラはサナと話しながらサナの家に向かった。そして、トナは自分の家に帰っていった。

ベラがサナの家に着くと、サナが書齋に連れて行ってくれた。ベラは本が大好きだ。だから、サナの家の書齋はベラにとって、天国のようなものだった。

そこは、物語、科学、絵本、何でもそろってあった。

「最高、サナ。見せてくれてありがとう」選んでる途中後ろを振り向き、とても、元気な声でサナに言った。

サナは、見ていた本から顔を上げ、

「喜んでくれて嬉しいよ」と、笑顔で言うとすぐに本に顔を戻した。すると、バタツと音を立てサナが倒れた。ベラはその音を聞くと、パツと後ろを振り向き、状況を理解しようと頭を回転させた。近づくともスースーと寝息を立てているので、ただ寝ているだけと思われる。だが、あんなに急に寝れるものなのか？と疑問を持ち、起こそうとサナの体を揺すった。

それでも起きないので、ベラは焦りもつと激しく揺すり声をかけた。すると、怖い夢を見たかのように叫んで、歪んだ顔でベラの肩を掴

み焦ったように言った。

「ベラ大変だよ、大変。ト、トナが何か黒いものと空をとんでる白いものに連れてかれる」思いもよらない彼女の言葉に一瞬驚いたが、すぐに「サナ大丈夫だよ。それはただの夢だから心配しないで、トナは連れてかれない」安心するように抱きつき背中をさすった。でも、サナはすぐに撥ねのき、信じてよ、と声を上げた。目には、涙が溜まっている。

「私にはよくあるの、こういうことが。両親とか友達が夢に出てくる時はいつも、一時間以内に夢と同じ事が起こる。そしていつも、後悔するの。ベラだって後悔したくないでしょ」

サナが言い終ると同時に何か大きなものがどこかに落ちる音がした。

「来た！ あいつらだ。トナのところに行かなくちゃ、ベラが信じないならここに居ていいよ」冷たい言葉を言い放つと立ち上がった。

「待って、サナ。なんで……何で助けようとするの？ まだ会って2日だよ、私はあなたを信じきってないから」これはずっと彼女が思っていた事だった。ルーアンダでの事があったのだからしょうがないことだ。

「私だって、出来る事なら信じて何でも相談して遊びたいよ。でも、前の事を考えると信じる事も出来ない」ベラがそういうと、サナはにこっ、と笑い

「大丈夫だよ。私だって信じてない。だって人は嘘を吐くものでしょ」これを聞いたベラは

「じゃあ、なぜ！ 信じろといった」興奮しすぎて言葉が男のようになっている。

「あれはしょうがなかったの。あなたの手で助けて欲しかったの」少し悲しそうに話している、ベラはあって2日目でサナの過去が知りたくなった。

ねえ、とサナが次の言葉を言おうとすると同時に、さっきの音がまた響いた。

「もう、連れてかれる。私はもう行くから着いて来るなら来て」そう言っ
てベラに背中を向ける。ベラも立ち上がり、走ってサナと一緒に自分の家
にかけて行った。

過去

それは突然起きた、彼女の心をねじ曲げるようなことは。

小学三年生の時、彼女は母親に突然殴られた。でも、彼女は黙って殴られた。泣きもせず、助けてとも乞いもしなかった。なぜなら友達に怪我をさせたから、もしかしたらその子は死んでしまうところだったのだ。悪いと反省していた、先生にも怒られたし、親に電話すると言われていたから、こうなるような気はしていた。だけど、殴り終わったあとに電話が鳴り、母親が受話器をとった。怖い顔をして戻ってくる。

「あんた、何したの！」

と怒鳴った。彼女は理解出来なかった。

さっき殴ってきたのは先生からの電話があつたからなんじゃないの？　なんで今頃そんなんこと聞くの、しかも電話が終わった後に頭にはこんなことしか出てこなかった。頭の整理が出来ないうちに母親は、もう一度同じことを繰り返した。

「わ、私はただ怒っちゃっただけだよ」彼女の声は震える。無理もない今の母親は怖い、怒ってもこんな顔はしなかった。

「怒っただけで殺しそうになるの！」母親は怒鳴るとまた殴った。その一撃で彼女は気を失った。

彼女が友達に怒った訳は、その子が彼女を化け物扱いしたからだ。彼女は友達に唯一の両親にも言えない悩みであって、秘密であったことを学校の近くの池で話してみた、それに見せてもみた。受け入れてくれると思っていた、自分が化け物だということを。だけど、違った。その子の反応はとて五年間友達だった反応ではなく、初めて会った化け物から逃げるようだった。その反応に、化け物だと自覚していた彼女も怒り狂った。肩まである綺麗なクリーム色の髪は水色に変わり、緑の目の色も水色に変わった。池の水を操り、そ

の子に津波のような水を思い切りかけた。当然水圧で池に流され、彼女は上から水をかけ、自分も池に飛び込むと水中で友達の首を締めた。

それを見ていた学校の友達が先生を呼び、みんなで駆けつけ、池から助けた。友達の方は息ができていない、すぐに人工呼吸をして病院に連れて行かれた。そして、サナが池から出ると池の水が無くなってしまった、みんなに秘密がばれてしまった。みんなは騒ぎ立てた、先生は場所を変え、怒り出した。

そしてああなった。

一時間か二時間たった後、サナは起きた。自分の部屋にいて殴られた跡が見えないよう服が長袖になっていた。隣の居間を見てみると、ヘルはソファに座り、何事もなかったかのようにルーンと話してる、それを見て、戻ったのかとサナは安心した。そして、話の輪に入り、驚くことを聞かされた。サナに姉弟が出来るのだ、ヘルは妊娠三ヶ月だと言う。その嬉しい知らせにさっきまでのことは全て忘れてしまった。

そして次の日。学校に行くとみんな寄り付かない、挨拶しても無視される、机には化け物はもうここに来るな！と書いてあった。それから優しかった先生も無視するようになった。最悪の学校生活の始まりだった。でも、サナは挫けずに姉弟が出来ることを糧に毎日通った。

それから、五ヶ月くらいたった時にまたヘルが殴るようになった。サナは何もしてないのに殴られた事に驚いたが、この前のようにすぐに元に戻ると思った。だが、考えてみると、止めることが出来るであろうルーンはしばらくほかのところの土地を見に行っている、しばらくは帰ってこない。そして、悟った。母はこれを待ってたんじゃないのか……、と。

最悪の日々だった。学校へ行くと無視され、あの友達が退院したので、教科書を隠されたり、チラリと見ると近くの席の子にヒソヒ

ソと悪口を言われたりと陰湿ないじめを受け、家へ帰ると妊娠してる母からの殴る、蹴るの繰り返しだった。助けてくれる人は誰もいない。とても死にたくなかった。

そして、ルーンが帰ってきた。それをはかったように赤ちゃんが生まれた。

その赤ちゃんはサナの弟で、ルーンはとても喜んだ。だがその子はすぐに肺炎になり、一時間もしないうちにこの世から居なくなつた。それが母には耐えられなかった。なぜなら、今回の赤ちゃんは男の子でないといけない、という思いに駆られていたからだ。それはルーンが女の子が欲しくないということからだった、サナは丸つきり望まれないで生まれてきた子ということだ。ルーンの方はサナが生まれてガツカリはしたが、今では関係なかった、でもヘルの方はルーンに嫌われたんじゃないか、もしかしたら捨てられるかもと過剰に反応していた。だから、妊娠したと知ったときは、やつと思いつ通りになると考え、サナに今までの怒りをぶつけたのだ。

だけど、その希望の赤ちゃんが死んでしまった。ヘルはしばらく部屋にこもっていた、そして久しぶりに出てきた、と母を見ると目がうつろで生気がない、サナはその場で固まってしまった、母の背中を見ると自分の部屋に向かっている、どうしてだろうと

「ママ、どうしたの？」

と声をかけてみた。すると驚くことを言われた。

「あんたがいるから幸せになれないのよ！ だから、私は死ぬわ」

それを聞いて、目的はベランダかと悟り、父を呼んだ。

その間にヘルは飛び降りた。

だが、死ねなかった。

そのベランダは低かった。だから飛び降りても打ち所が悪くなければ骨折程度ですんだ。でも、ヘルは頭を打ったため記憶を失った。全てではなく、一部の赤ちゃんを妊娠してから、死のうとしたところ

ろまでだ、これが一番辛かったことだったんだろう。

ヘルが入院してるときに、サナはヘルの部屋に忍び込み日記を見つけた。その日記はサナがいない子であることが全て書いてあり、生まれてきたことの怒りも書いてあった全てなぐり書きだ。恨みが募ってきた。いつも優しくかった母がこんなこと思っていたなんて、と。死のうとしてる時の酷かった。だから破り、燃やした。

人は信じられない、笑顔の裏で何を考えているのかわからない。あの子だって何があっても一生友達だって言ってたのに、結局裏切られた。パパだって私のこと生まれてこなければよかったのについて思ってるんでしょ、信じちゃダメだ。

そしてスノアークスに住んだ日からサナは笑顔を絶やさない女の子になった。明るくていい子だ、皆がそう言う。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0360/>

火水風土

2011年11月15日07時39分発行